



オーケストラの大きな太鼓、ティンパニはステージ最後部の上段、真ん中に陣取ることが多い。オーケストラ全体を見渡すポジション。サッカーのゴールキーパーのように「守護神」と呼びたくなる。大阪フィルハーモニー交響楽団時代の中谷満さんはまさにそんな頼もしい存在だった。現在は相愛大学音楽学部教授・同志社女子大講師として若い音楽家を育てている。生まれ育った滋賀の音楽文化を耕し、豊かにする活動にも力を注いできた。エネルギーと情熱の原点は、高校時代に音楽に深く心を揺さぶられた経験だという。

なかに みつる

- 1949年 大津市大江生まれ
- 1968年 県立大津高校卒業
- 1973年 京都市立芸術大学音楽学部打楽器専攻卒業。大阪フィルハーモニー交響楽団に入団
- 1977年 1年間、旧西ドイツの国立ベルリン高等学院に留学。ベルリン・フィル首席ティンパニストW.テリヒェン及び国立ベルリン・ドイツ・オペラ管弦楽団首席打楽器奏者K.キースナーに師事し、ベルリン放送管弦楽団、ベルリン・ドイツ・オペラ管弦楽団などに出演。帰国後、大阪フィルに復団。
- 1990年 パーカッション・アンサンブル「シュレーゲル」設立
- 1991年 滋賀音楽振興会設立に参加 現在は会長を務める
- 2005年 さきらジュニアオーケストラアカデミー スーパーヴァイザー
- 2008年 大阪フィルを退団、相愛大学音楽学部教授に就任。打楽器協奏曲のソロ、アンサンブル、ドイツ・フライブルク音楽大学に招かれての演奏やマスタークラスでも活躍。
- 2018年 滋賀県文化賞受賞

感動する体験

子どもたちに贈りたい

● インタビュー

うみ

湖生さん

打楽器奏者・滋賀音楽振興会会長

中谷 満さん

聞き手・佐藤 千晴
写 真・内池 秀人

—なぜ打楽器を選んだのですか？

積極的に選んだわけではなく、巡り合わせです。音楽家になる人生も想像していませんでした。

大津・瀬田の兼業農家の長男に生まれ、父も祖父も国鉄（現JR）に勤めながら農業をやっていたので、自分もそうなるだろうと漠然と思っていました。

音楽との出会いは小学校時代です。転校生のかわいい双子の女の子が奏でるマリンバに憧れて、鼓笛隊に入りました。男は僕ひとりだったので、割り振られたのがシンバルや大太鼓でした。

5年生の担任だった酒井先生は、給食の時にさまざまなクラシックを聴かせてくれました。作曲家や作品の話はせずに「音楽からどんな物語を想像しましたか？」と問いかける。今振り返れば、音楽に心を動かし、物語をつむぐ時間はとても豊かでした。

瀬田中学では吹奏楽部に入りました。トロンボーンがかっこいいなあと志望しましたが、空気がなくて打楽器担当に。瀬田中にはオーケストラもあったので、放課後は5時まで吹奏楽、そ

の後8時までオケの練習という毎日でした。

県立大津高校でもトロンボーンをやりたい、で、「誰かトロンボーン吹ける奴おるか」「はい、できます！」って経歴を詐称して楽器を手にすることに成功しましたが、打楽器担当がいなくなってしまう、ほどなく打楽器に戻る羽目

アーティストを学校に招き演奏会がありました。そこで出会ったのがソプラノ歌手の砂原美智子さん。歌に感動の余りその夜は眠れず、浅見先生に「本気で音楽の道に進みたい」と相談すると「打楽器で音楽大学に進んだら」と勧められました。



相愛高校(大阪府中央区)でのレッスン風景。体の使い方や視線の向きを矢継ぎ早にアドバイス。まるでスポーツのようだ

でも、僕は入試に必要なピアノを習ったことがないし、音楽理論も何も知らない。浅見先生に基礎を習い、学校の音楽室でピアノの練習をさせてもらいました。

音大進学に父は猛反対でしたが、祖母が「音楽の先生になると言いなさい」と助け舟を出してくれ、私学と東京はアカンという条件でようやく許してもらえました。当時の京都市立芸術短期大学を受けて最初の年は落ち、浪人して合格。それが運良く4年制大学に改組した年でした。

になりました。

—打楽器との縁は運命みたいなものですね。音楽家を目指すきっかけは？

高校時代の体験です。音楽の浅見先生は武蔵野音大で声楽を専攻した女性で、毎年、様々な

—大学を卒業するとすぐに大阪フィルに。順風満帆のスタートでしたね

いえいえ、学生時代は劣等感にさいなまれていました。ピアノや弦楽器で入った学生とは音楽の基礎力に大きな差がありましたから。

ベルリン留学時代の恩師、ヴェルナー・テールヒエンさんと。凝った額に入れて大切に飾っている（中谷満さん提供）



1985年、指揮者朝比奈隆さん（右）と大阪市のザ・シンフォニーホールで、「ラブレター」と呼んだ指示のメモを見ながら真剣なやりとり（写真家・木之下晃さん撮影）

大学にはプロオーケストラの打楽器奏者として活躍するOBが自分の練習のためによく出入りしていて、とても刺激的でした。演奏会や打ち上げに誘われて親しくなり、オケにエキストラ（臨時奏者）として呼んでもらえるようになった。3回生の時に大阪フィルの団員に。山口十郎さんが留学のため退団して空席が出たんです。卒業までは学生契約でした。

オケでも力のなさを痛感しました。年間100回を超える演奏会に勉強が追いつかない。「運命」「新世界」のような定番はほとんど練習なしで本番なのに、僕は経験ゼロです。楽器を叩けば叱られる、の繰り返し。指揮の朝比奈隆さんに「お前はオーケストラが見えていない、音楽が聞こえていない」と集中的にしごかれました。

—朝比奈さんは大阪フィルを創設、2001年に93歳で亡くなる直前まで現役を買いた「大阪フィルの顔」でした。どんな存在でしたか？

めちゃくちゃ怖い人でした。そして、とにかく一生懸命。リハーサルが終わると録音を聞き、チェックポイントを書き出して奏者に渡すんです。僕らは「ラブレター」と呼んで恐れていました。80歳を越えたあたりから音楽がどんどんシンプルに、素晴らしくなり、楽員に任せてくれることが増えました。最後の演奏会は指揮

棒を振らず、ただ立っていただけなのに、見事に親方（朝比奈さんの愛称）の音楽が鳴りました。あの日の親方の不思議な笑顔は忘れられません。

—大阪フィル5年目に当時の西ドイツに留学しました

オケで完全に行き詰まって、親しい先輩たちに相談すると「いったん辞めて留学してこい」と勧められ、西ベルリンへ。ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の名奏者ヴェルナー・テールヒエンさんに師事しました。まだベルリンの壁があつた時代です。

留学中の1年間に400回はコンサートに通いました。「ベルリン・フィルの帝王」と呼ばれた指揮者ヘルベルト・フォン・カラヤンのリハーサルもたびたび見学して、その厳しさに、名門楽団のメンバーといえどもストレスと闘っているんやなあ、と共感しました。本当に勉強させてもらいましたし、一緒に学んだ仲間も財産。みんな世界のオーケストラや音楽大学の要職に就いています。

—帰国後は大阪フィルに復団、演奏家としての円熟期を迎えますが、大きな病気に襲われました

首にしこりができ、検査をしたら悪性リンパ腫。血液のがんの一種で、ステージ3、脾臓に



教える子たちと打楽器アンサンブルを組んで演奏会も開く

も転移とかなり進んでいました。1999年、50歳を迎える年のことです。8カ月入院、自家造血幹細胞移植というきつい治療が成功して元気になりました。あの時、もしものことがあったら今見ている景色は見られへんかった。感謝、感謝です。

—大阪フィルで演奏しながら若手の育成や滋賀での活動にも力を入れてきました

大阪フィルにはオーケストラのかたわら地域で熱心に音楽の種をまき、育てている先輩方がいて、「地域のこともしつかりやれ」と教えられました。瀬田は昔ながらの地域の結びつきが強く、地元の仲間ともずっとつながっています。滋賀が大好きで、留学期間を除いて生まれ育った瀬田を離れたことはありません。

91年に滋賀音楽振興会の立ち上げに参加しました。びわ湖ホールの建設計画が進む中、県内の音楽人の大同団結を呼びかけた団体で、99年にはびわ湖祝祭管弦楽団を組織してびわ湖ホール開館記念シリーズで演奏しました。「びわ湖に大きな音楽の環を」をモットーに新人演奏会、音楽サポーター事業などを続けています。

—栗東芸術文化会館SAKURAの「ユキ」ジュニアオーケストラ」も2010年の設立時から指導しています

オケに先行して、音楽の基礎を実技と理論の両面で教える「さくらジュニアオーケストラアカデミー」を2005年に始めました。オケで演奏するためには音楽学の知識が必要ですから。初代校長は大阪フィルの先輩でバイオリニストの藤井允人さん。

オケは小学生から高校生まで。日本を代表する指揮者・秋山和慶さんに音楽顧問をお願いしています。昨年11月の第10回定期演奏会は秋山さんの指揮でベートーベンの「第九」でした。卒業生から音楽大学に進む子も出始めました。

—将来の夢は何ですか？

びわ湖ホールに専属のオーケストラをつくること！

僕が音楽に感動して人生が変わったように、ひとりでも多くの子どもに芸術に心を動かされる経験を贈りたい。オーケストラはそういう文化を支える人づくり、地域づくり、国づくりの象徴です。

ヨーロッパに追いつけ追い越せとクラシックを演奏するだけがオーケストラではありません。日本から文化を発信する新しいツールとして活用できる。相愛大学では雅楽とのコラボレーションなどの実験も始めました。これからは若い世代と一緒に、オーケストラの可能性をどんどん広げていきたいですね。